



Each Day With Baby



pinkpanda

パブリック・ベビー

ベビー連れでいると、声をかけられることが多い。

病院の待合室で、デパートのエスカレータで、ドラッグストアのレジで、スーパーの野菜コーナーで。

まあ、赤ちゃん。

何カ月ですか？

あらかわいい、ちょっと見せて。

まあ小さいお手手！

寝ているかと思ったら、お目目開いているじゃない、おとなしいのね。

たいていは年輩の女性である。

一般的な時間尺度で言うと、ベビーがベビーでいるのはほんのわずかな時間だ。

だからベビー人口は少ない。ベビーの定義にもよるけど、乳児とすれば、人生80年のうちの1年とか、幼稚園前とすれば3年とかか。

それに、毎日出歩くわけでもないのだから、街中でベビーを見ることは少ない。

ベビーを自分で扱ってみるとその貴重さ——それも公共的な——を実感する。

ベビーは私物ではなく、公共的な財産である。

それがわかると、結婚や出産が”プライベート”ではないこともよくわかる。結婚・出産が個人の自由だと思っただけでいい。いやもちろん個人の自由もあるんだけど、思った以上にもっと公共的なものであることを分かっておいたほうがいい。そしてそのほうが気が楽。公共のために結婚・出産するのだから、会社に迷惑をかけるとか仕事がどうのとかそういった点は仕方ないのだ、個人のせいでは全然ないのだ。迷惑をかけているような感覚があるとしたら、あえて言えばそれは社会システムのせいであり、プライベートで迷惑をかけているわけでは全然ない。これっぽっちもだ。

もしあなたが仕事が忙しくて出産を迷っているなら、少なくとも営利目的の企業内の仕事よりも出産のほうが公共的だと考えるべきだ、として背中を押したい。きっと人は、子供がほしいかほしくないかは個人の自由だとか、結局のところ出産はプライベートで個人の責任だとか、考えようによってはすごく冷たいことを言うでしょう。

でも私は出産は公共的な仕事である、と言って背中を押したい。この理由であれば、母性とか母親の適正とか責任とかかわいいと思えるかどうかなんてまったくの無関係だ。ていうかほんとさあ、子育てってそこまで親だけの責任じゃないってことにしない？もちょっと気楽に出産できたほうがいいよねえ・・・

もっともあなたの仕事が医療や政治や最先端の研究開発といった分野だったら、出産よりも公共的な仕事を行っていると言えるかもしれないけどね。

ともあれ、パブリックであると思えばこそ、デパートや病院でベビーを見かけたら声をかけたくなるのだろう。だってベビーはみんなにやいのやいの愛されるべき存在だから。

男性や若い女の子には声をかけられない。

ほとんどが年輩の女性だ。

年輩の女性は、自身も過去にベビーを持ったことがあり、そのときの記憶を思い出すのかもしれない。それがどんなに何十年も前のことでも、ほんのいつときの短い間の経験でも、そのときの苦労、人間を育てることの不安、そして発見の連続の日々は、強烈で鮮明な特殊な記憶として残るのだろう。そしてほんの一瞬ベビーを見ただけで、それは瞬時に引き出されるのだろう。

だからまったく知らない、出身地も年齢層も異なる女性同士でも、ただひとつベビーを持ったことがあるという共通点さえあれば、無意識に仲間意識ができる。

見も知らぬ赤の他人同士なのに、つい声をかけたくなったり、つい手を差し伸べたくなったりする、そういう共通性、公共性が、ベビーにはある。

ベビーを介して、ベビー持ち女性にはそれが見える。

ベビーを持つ前と後では、いろいろなものが違って見えるという。社会の見え方もそうかもしれない。

たとえば主婦という職業にはドメスティックでプライベートなイメージがあるが、ベビーが公共的なものであるという見方をすれば、家で育児を行っている主婦は実はなによりもパブリックな職業にも見えてくるから不思議だ。

でまあ私も、隣の席にベビー連れの人が座ったらついつい声をかけるおばちゃんになりそうである。

あら赤ちゃん、かわいいわねえ、何カ月？まあ小さいお手手！

人に迷惑をかけよ

マタニティ期、病院では医師や助産師が、プライベートでは両親や夫、旧友が、とにかくみんなが、身体を大切に、体調に気を使え、大事をとれっていう。

いっぽうで会社側には、職場環境にもよるが、なかなかマタニティ的なことは公開できない。なにしろマタニティ的なことは神秘の世界であり、たまひよが言うほど完全ハッピーな世界じゃなくて、いろんなリスクがあるのだ。しかもけっこうな高確率で。

ぶっちゃけて言うと、全妊娠の15%くらいがダメになってしまったりするわけで、その他後半で出るようなものを含めると20%くらいいろいろあるのだ。

それも、安定期になればほぼOKってわけでもなくて、まあ確率的にはぐっとOK率が上昇するんだけど、全然その後もいろいろなことが世の中では起こっている。しかも、もともと母体の体が悪かったり高齢だったりなどのハイリスクなことが原因ならともかく、原因はないことも多い。どんなに安全・安心に気を配ったって、起こるものは起こる。誰も悪くなくても。まさに神秘。ミステリーの世界だ。

しかしながら、これは経験しないと知られていない世界だ。

順調な妊婦に無用な不安を与えるのは良くないため、わざわざリスクを聞かせることは少ない。だから経産婦でもたまひよ的な完全ハッピーだけしか知らない人もいる。独身者のような、もっと外部の人間であれば、もっと知らないにちがいない。うまくいかない確率が意外に高いことも、医療でわかっていることは少なくまだまだ神秘の世界であることも。

さらに言えば、つわりというものも経験してみないとわからないものである。

つわりといえ、食べるものがダメになって吐いてしまうやつが思い浮かぶが、実はそれだけではない。いろんな症状があるのだ。

腰痛、軽い腹部の痛み、夜の不眠、昼の眠気、頻脈、動悸息切れ、めまい、ありえないほど疲れやすい、貧血、高血圧、集中力低下、虫歯になりやすい、下痢、便秘、頭痛、こむら返り・・・といった、いろんなことが、入れ換わり立ち替わりであられる。あられかたはその人次第、人によって異なる。だから同じ妊婦に見えても、症状はそれぞれ違い、共有できない。あるひとりの経験と別のひとりの経験は異なる。

だから一般的なつわりじゃなくても、けっこう通常状態とは違ってしまって、わりと生活に制限がかかるのだ。

平日普通のふりして会社行っても、土日完全にすっかり丸二日臥せってしまったりする。

こうしたちょっとした不調の積み重ねは、つわりがひどいとされる5か月までではなく妊娠全期に

わたり、八か月、九か月続く。

だから、マタニティ的な期間には、妊婦は以下のタスクをこなさなければならない。

問題を公開しないままに他人に仕事を押し付けること。

自分自身の仕事を軽減させつつ、罪悪感や歯がゆさには目をつぶること。

問題を一人で抱える孤独感に耐えること。

つまり、一言で言うと、

人に迷惑をかけることを許容すること。

これが妊婦の試練なのだ。

日本人は「人に迷惑をかけない」ことを気にし過ぎる傾向にある。人に迷惑をかけないことが何よりも優先されるような倫理観を持っている。それは論理的な善悪以上に優先される。いくら自由だっていったって、人に迷惑をかけてはだめでしょう、ってそんな意見が一般的だ。

だけど私はその倫理観、道徳観は、少子化の原因のひとつだと思う。「人に迷惑をかけない至上主義」。

女性は結婚や出産や育児で、図々しく、ふてぶてしくなるという。きっと、人に迷惑をかけるアビリティを身につけるからだ。

イクメン男性だって、身につけなければならない。人に迷惑をかけるアビリティを。

仕事を他人に押し付けて小児科に行き、子供の大音量の泣き声をあたりに振りまきつつ、自分の体力も回復させて持続可能な生活をはかる。そういうことができなくてはならない。

すいませんねえと困った顔であやまりつつも、図々しく行動するアビリティだ。

人に迷惑をかけるべし。

人に迷惑をかけることを自分自身に許すべし。

面の皮を厚くせよ。

それがミッションだ。

ひとみしりで疲労感

育児ノイローゼのニュースに、テレビのコメンテーターが「誰かに相談することはできなかったのでしょうかねえ」と言う。

お決まりのセリフだ。お決まりのセリフを言うことがコメンテーターの仕事だから仕方がない。

さて、最近、新たな兆候が見られた。

ひとみしりだ。

あるとき母が来て、ベビーに向かって「おばあちゃんですよ」と笑いかけた。

じっと見る。

「あら、じっと見ているね、こんにちは（にこにこ）」

じっと見る。

「こんにちは（にこにこ）」

うっっっという顔をする。見る見る間に、顔が赤くなり、目に大粒の涙が浮かぶ。

「ぎゃあ、泣くな」

「うわああああー」

普段、ちょっとぐずったときや、ちょっとお腹がすいたときとは違う、爆音のおお泣きである。

私も母もびっくりしてしまう。前に会った時はにこにこしていたのに！全然平気だったのに！

そういえば、二三日前にもショッピングモールのエレベータで同じようなことがあった。

ベビーカートを押してエレベータに入る。先にいたお客さんのおばさんの隣にベビーカートが位置するかたちになった。

おばさんがベビーに話しかける。

「あら、じっと見ているわね、こんにちは（にこにこ）」

じっと見る。

「知らないおばさんが珍しいの（にこにこ）」

じっと見る。

「じっと見ているのねえ（にこにこ）」

うっっっという顔をする。顔が赤くなり、目に涙が浮かぶ。

「えっ？怖かったの？怖くないわよー（焦）」

「うわああああー」

私もびっくりである。

「どうしたの、泣くことないよ」

「ごめんねえ、知らないおばさん怖かったのねえ」

「すみません」

「ごめんなさいねえ」

祖母世代のおばさんに対して、ひとみしりをするようになったのだろうか？

実はそうでもない。私と同じくらいの年齢の女性がうちに遊びに来てくれたときも、途中でおお泣きされてしまった。

もっとも、「泣いててもかわいー」と言ってくれるのがありがたい。

ひとみしりは、成長のあかしだ。

いつも一緒にいる両親とそれ以外の人を、区別することができるようになったということだ。

喜ばしいことである。

しかしながら、家に閉じこもりがちで、人と会う機会が少なくなりがちな母親としては、本当は気軽にどこかに出かけて人と会うことが気晴らしになる。できるだけ意識して外出を多くしていきたいところだ。

ところが外出して知人に会うたびに泣かれてしまうと、かえって疲労が大きくなる。外出＝疲労大、という構図が母親の頭に刷り込まれてしまうと、外出したり人に会ったりするのが億劫になる。

もともとは自分の気晴らしに始めたことが、むしろ自分の疲労につながるとすれば、気晴らしを行うこともできなくなる。

これが母親が孤立していく仕組みのひとつなのかもしれない。

「誰かに相談できなかつたのかしらねえ」？

相談しに行くとおお泣きされて、それでも相談しに行っても「あら大変ねえ愚痴なら聞くわよ」程度でたいして効果がある情報は得られなくて、ただただ疲労して帰ってくる。

それを何回か繰り返したら、もう、大変な思いをして相談しに行くのをやめてしまうのではないだろうか。

と、思った。

デフォルトで、構造的に、仕組み的に、孤立するようになってしまうんだ。きっと。

さて、しかしながらだ。

後日明らかになったのだが、実はこのひとみしりには抜け道があった。

相手が大人、特に年寄り、男性に対してはひとみしりが起きやすいが、相手が同じ乳幼児だと、同類だと思うのだろうか、ちょっと反応が違うのだ。乳幼児相手にはひとみしりが起きない！

そういうわけで、ひとみしりが始まったとしても、あきらめずにいろんな相手を試してみよう。
特に乳幼児のいる場所に行ってみよう。保育園のイベントに参加してみよう。
もちろんそれでもひとみしりで泣かれたりして疲労困憊するかもしれないけど。
ていうか保育園のイベントではむしろ母親である私がひとみしりして疲労困憊するけど。

まあそれも私のところの場合であって、ひとそれぞれ違うだろう。
本当に、まったく、手探りばかりなのである。
やれやれ。

24時間365日無休

わかっていたことだけど、母親業務は無休だ。

今日すごく残業すれば明日が楽になる、みたいな仕事ではない。

明日は明日で、仕事は休めない。

だから、無理をしてはいけない。

ヤル気になりすぎて無茶をすれば翌日が、いやその前に、その日の夜がしんどくなる。

どんなにがんばってたくたになっても、ベビーが夜起きれば一緒に起きるし、必要なら夜間ちょくちょく授乳する。自分の連続睡眠時間が疲れた体に十分なほどに確保できるとは限らないのだ。

無理をしないことである。

しかし実は自由に無理や無茶ができないこと、これもまたストレスだということに気づく。

旧友に会ったってはっちゃけすぎたりしないし、2時間だけ家族にベビーを預けて飲み会にいったとしても絶対に暴飲暴食しないし。

ちょっと疲れを感じた時は、ベビーが昼寝したときに一緒にうとうとしようとする。2時間くらい眠れるだろうか...と思いながら。

残念ながら30分くらいでふえーんという声が聞こえて、結局全然眠れなかったと思いながらベビーを抱きあげる。

そんな日々だ。

先日、託児所つき美容院に行ったときに、はじめて少しだけ保育士さんに預けた。

ベビーのことをすっかり忘れてしまえばいいものを、別室の託児所をちらちら見ては、シャンプーされながら、雑誌を見ながら、人見知りしていないだろうか、泣いていないだろうか、お腹がすいていないだろうかと思ってしまう。

思えば生まれてこのかた、ベビーと私は3時間以上互いに顔をみなかったことがない。

母親のほうも慣れが必要なのもかもしれない。

たまに、夫がベビーを散歩に連れて行ってくれる。

1時間か2時間か、家で久々にひとりになった私は、やりたいことがたくさんありすぎて、何をしたらいいか決められない。

本が読みたい。写真を整理したい。部屋を片づけたい。眠りたい。ストレッチしてリラックスし

たい。ゆっくりスイーツが食べたい。
でも結局すぐにその1時間か2時間は過ぎる。

なにかを始めたいとか、なにかにチャレンジするとか、そういうことはいまは遠い。
たぶんベビーを持っている母親たちはみんな、サバイバル中なんだろう。

日々を生きる。

今日を生きる。

明日を生きる。

発熱を乗り切る。

夜間の授乳を乗り切る。

いつになったらゆっくり長く眠れるのかわからない。

どれだけ続くかわからない、次の日の予定は立たない日々。

まるで非常事態宣言の世界みたいだ。

疲れ過ぎてはいけない。倒れてはいけない。

サバイブせよ。